



言語学遊び

—自己紹介に代えて

上野 誠 治

1歳半になる娘の好物は人参と牛乳である。言葉を覚え始めた彼女は、近頃何かにつけて「にんにん」「にゅうにゅう」と言う。「にんじん」や「ぎゅうにゅう」が言えずにそんな変な発音になってしまうのだが、英語学・言語学(と言っても、専門は主として英語の統語論や意味論)を専攻する父親はそれを微笑ましく思うだけでなく、ついその言語事実を観察し考察してしまう。「なぜそんな発音になるのか」と。因果な商売である。

言語には、ある音素が隣接する音素の影響を受けて同じ音声的特徴を帯びたり、あるいはその音と同じになる「同化」と呼ばれる現象がある。「にんにん」は本来/ninzi:n/となるはずのものが言いづらいため/ninnin/と発音されてしまったのだろうが、これは語中の/z/が鼻音/n/に影響され同化(この場合は鼻音化)したと考えられる。同じように「にゅうにゅう」は/gju:nju:/の/g/が鼻音/n/の影響を受け/nju:nju:/と変化したものであろう。英語でgood morningの/d/が鼻音/m/に同化して「グッモーニング」に聞こえるのと同じである。また、ある母音が近隣の母音などに影響を受ける「ウムラウト」という現象もある。実は、妻が関西人(奈良県)なので日頃から興味深い言語事実と直面することがある。例えば、関西弁では/yomahen/ (読まない) や/de:hen/ (出ない) のように/-hen/で否定を表すが、「来る」や「見る」の場合は/ki:hin/ や/mi:hin/となり、/-hin/が使われる。これは本来規則的には/ki:hen/となるはずのものが前の音節の母音/i/の影響を受けて、後続する音節の/e/が/i/に変化したものであろう。footの複数形に関してゲルマン祖語で*fōtizであったものが、/i/の影響でfōeti > fētiに変わり、その後さらに複数語尾が消失しfētとなり現代英語のfeetとなった現象と基本的には同じである。

こんな話ばかりしていると妻からは呆れられてしまうのが常だが、「言語学遊び」の種はあちこちに転がっていて尽きることがない。

(英米文化学助教授)